新世紀ミュージアム

記憶の場所――寛容と社会的包摂
Lugar de la Memoria, la Tolerancia y la Inclusión Social ／ペルー

ANFASEP 記憶博物館「繰り返されないために」
Museo de la Memoria de ANFASEP “Para que no se repita” ／ペルー

関雄二（せきゆうじ） 民博 人類文明誌研究部

ともに「記憶」の名が付いたペルーのふたつの博物館。同じテロリスト、同じ国軍による暴力を扱っているはずなのに、二館で受けた印象はそれぞれ違った。その違いはどこからくるのか。設立者の違いだけではないその理由をさぐる。

風光明媚（ふうこうめいび）にして古代文明の揺籃（ようらん）の地である南米ペルーは、一九八〇年から二〇〇〇年にかけテロリズムの嵐に巻き込まれた。経済の破綻と貧困の拡大は、極左集団の登場を促し、それに対抗した国軍による暴力も蔓延（まんえん）した。「真相究明と和解委員会」が政府に提出した最終報告書によれば、犠牲者は六万九二八〇人にのぼった。こうした負の歴史を公共空間でどのように扱い、描くのかはペルーのみならず、地球上のさまざまな地域における大きな課題でもある。

民主主義の視点

二〇一五年、首都リマの高級住宅地として名高いミラフローレス地区にその暴力の時代を扱った施設「記憶の場所――寛容と社会的包摂」が開館した。コンクリートの打ちっ放しの現代的な建物ながら、施設名称を示すプレートは地味である。一階では、暴力の時代をペルー社会の歴史のなかに位置付けるとともに、犠牲者の遺族や加害者の家族の証言映像が繰り返し流れる。モノの展示はほとんどない。二階は、暴力に対抗した市民運動を扱う。現在、人権侵害や汚職の罪で収監されているアルベルト・フジモリ元大統領を暴力の時代の最後の主役と位置付け、それ以降を民主主義の時代と宣言している。首謀者の逮捕などテロ撲滅の功績をたたえられることの多いフジモリだが、それも不当逮捕や虐殺を許したからできたのだという論理である。そして三階で、暴力の犠牲者への奉納品を美術的に飾ることで展示を終える。

「記憶の場所――寛容と社会的包摂」の外観（2017年）

テロの終結から二〇年にも満たない現在、民主主義は確立しつつあるとはいえ、暴力の時代に対する評価は定まっておらず、大統領選のたびに政治問題化される。そのようななかで、バランスよく展示をまとめ上げている、というのが第一印象である。

創設過程も興味深い。二〇〇八年に創設準備が開始されるのは、ドイツからの資金供与の申し出があったからである。ペルーの政治家、新聞記者、哲学者、人類学者、博物館学の専門家による展示コンセプトや設計についての討議には、強制収容所の展示や平和教育に通じたドイツやポーランドの専門家が招聘（しょうへい）された。また最終案は、暴力の犠牲者にも開示され、その意見をもとに修正も加えられた。さらに施設名称には、暴力の記憶を過去の遺物ではなく、生成し続け、よりよい未来社会を描くための糧とするという意味を込めたという。

ともかく民主主義を絵に描いたような過程を経てできた施設である。それだけに歴史を学ぶ場としては評価できる。しかし、どことなく現実感に欠けているように思えたのはどうしてであろうか。

犠牲者の証言を流す映像に見入る来館者（2017年）

モノのもつ伝達力

それは、無差別テロ集団であったセンデーロ・ルミノーソ（「輝ける道」の意）結成の地である中央高地アヤクチョ市で訪れた別の博物館での記憶があるからかもしれない。ANFASEP記憶博物館「繰り返されないために」がそれである。ANFASEPとは「ペルー誘拐・捕縛・失踪者家族の会」の頭文字をとったNGO組織であり、二〇〇五年にペルー政府や人権団体、国際協力団体の支援を受けてこの博物館を開館させた。雑居ビルのような建物の二階がその場所であり、お世辞にもきれいとは言えない。しかし、建物の外壁には暴力の時代を象徴する壁画が色鮮やかに描かれている。この団体のメンバーが自ら筆をとったという。テロの巣窟であったアヤクチョ地方では、テロ集団ばかりでなく、テロ撲滅の名の下で国軍による不法逮捕、拷問、そして虐殺が横行した。博物館の展示でも暴力の時代の歴史を振り返り、国軍が使用した、ロッカーのように狭い拷問用の収監ボックスのレプリカが置かれている。また収監された無実の青年が母親にあてた手紙、虐殺時に身に付けていた衣服、収監中に使用したみすぼらしい食器が飾られる。そして最後には、この組織を立ち上げた犠牲者の遺族たちの闘争が写真パネルで示される。「記憶の場所」のような洗練された展示はひとつもない反面、現実感に満ちあふれている。

ANFASEP記憶博物館外観（2014年）

この小さな博物館が、国立の巨大な施設以上に伝達力をもつとするならば、それはモノを主体においた展示によるのだろう。そして、犠牲者遺族による壁画や展示制作への直接的な関与も、展示に力を与えている。国立にせよ、私立にせよ暴力の時代を無色透明の歴史に貶（おとし）めないための展示の葛藤は続いている。

暴力の犠牲者の若者の衣服と、遺族が抗議に使用した布製横断幕（2014年）